都橘大学　西野毅朗

コロナ禍中のゼミ運営

全国ゼミ所属学生調査から見えたこと

遠隔化でゼミ学習はしやすくなったか

遠隔化が共同体に与えた影響

学生が望むゼミの実施形態

コロナ禍中のゼミ運営で意識したいこと

コロナ禍が続いていたところ、対面のみと回答した学生は20%にすぎなかった。同年9月時点で文部科学省が調査した結果によれば、各大学の授業形態や遠隔をいったりする不安定な方針は62・3%が「対面」と回答していたことと比較すれば、驚くほどの間、筆者は大と少ない。さらに実際の実施形態の内訳をみると、高いものから順に「対面と遠隔の併用（対面の授業回と遠隔の授業回がある形）」27%、「遠隔のみ（ビデオ会議システムを用いた同時双方向型）」24%、「遠隔のみ（オンデマンド型）」13%、「対面と遠隔の併用（対面と遠隔が同時に行われ、学生が好きな方を選べる形）」12%等となった。前期に比べれば対面要素が増えたものの、遠隔実施が避けられない状況は変わらない。

まず、ゼミの遠隔化によって〝しやすくなった〟ことを肯定的回答／否定的回答で分析する。まず「出席」は肯定的回答53%／否定的回答11%となり、オンラインゼミの方が出席はしやすいと考えられている。一方で「授業中の発言・質問」は同24%／42%、「授業中の学生同士のやりとり」は同じ15%／62%と、否定的回答が大きく上回っており、コミュニケーションは取りにくくなっている。なお、「授業中のプレゼンテーション」は同36%／33%、「授業外でのゼミの内容に関する自主学習」は同31%／27%となっており、肯定的回答と否定的回答の平均は65%と実に5倍の開きがあった。相手が教員であれ学生であれ、コロナ禍以前から人間関係を構築できている間柄においては遠隔化されてもコミュニケーションのしやすさは「変わらない」とする学生がいる一方、新しい関係づくりや一層深い関係づくりを志向する場合、遠隔ゼミは不向きと考えられる。

特に異学年の学生とのコミュニケーションについては否定的回答が79%に上っており、ゼミが持つ特徴の1つである縦の関係づくりが非常に難しくなっていることが浮き彫りになった。この要因は、コロナ禍の影響で授業時間外のコンパや合宿などのイベントが全て中止になってしまっているためであろう。先輩が後輩を育てるという文化を大切にしてきたゼミにとっては、大きな問題になっているのではないだろうか。

ゼミは学習の場であると同時に、教員と学生たちによって構成される共同体でもある。共同体づくりの成否は、学習成果の獲得度にも関わってくる。遠隔化は、授業時間内だけでなく、授業時間外の構成員間のコミュニケーションにどのような影響を与えただろうか。

授業外における「教員」「同学年の学生」「異学年の学生」とのコミュニケーションについて尋ねたところ、肯定的回答の平均が13%であったのに対して、否定的回答の平均は65%と実に5倍の開きがあった。相手が教員であれ学生であれ、コロナ禍以前から人間関係を構築できている間柄においては遠隔化されてもコミュニケーションのしやすさは「変わらない」とする学生がいる一方、新しい関係づくりや一層深い関係づくりを志向する場合、遠隔ゼミは不向きと考えられる。

特に異学年の学生とのコミュニケーションについては否定的回答が79%に上っており、ゼミが持つ特徴の1つである縦の関係づくりが非常に難しくなっていることが浮き彫りになった。この要因は、コロナ禍の影響で授業時間外のコンパや合宿などのイベントが全て中止になってしまっているためであろう。先輩が後輩を育てるという文化を大切にしてきたゼミにとっては、大きな問題になっているのではないだろうか。

対面希望の大きな理由としては、コミュニケーションの取りやすさや、学習意欲や集中力を高められることが挙げられた。学科やゼミによっては、現地調査や実験、実技を特徴するところもあり、それらはどうしても対面で行うことが必要となる。また、インターネット環境やICT関連トラブルの予防や、長時間の遠隔授業は疲れるためという理由もある。

遠隔希望の大きな理由としては、一番に新型コロナウイルスに対する不安が挙がる。さらに、通学コストの低減、学習のしやすさと続く。学習のしやすさについては、「コミュニケーションを必要としない知識獲得型の内容については」や、「自らの学びをコントロールできる学生にとっては」という条件がつくだろう。

遠隔希望の理由の中には、他者とコミュニケーションをとらなくてよいからという理由も散見される。実施形態の希望やその理由は、一括りでは考えにくく、目の前の学生や状況を考慮しつつ、効果的・効率的に学習成果を高められる方法を選択していく必要があるだろう。

本調査結果と、筆者が2020年に行ったインタビュー調査の結果（西野2020等）をふまえ、コロナ禍中のゼミ運営で意識したいポイントを3つにまとめる。

第1に、普段以上に双方向性を意識することである。例えば、久しぶりに対面で授業を行う場合は、いつも以上に教員―学生、学生―学生間の交流時間を多く、長くとる必要があるだろう。いつまた遠隔実施になるかもわからない状況であることを考えれば、遠隔になってもコミュニケーションがとれるような人間関係の基盤を早期につくりたい。

また、遠隔授業の場合は、できる限りオンデマンドではなく、ビデオ会議システムを用いた同時双方向型の授業が望ましい。そして、その授業実施の際には「チャット」「画面共有」「ブレイクアウトルーム」の3つの機能を駆使したい。「チャット」は、対面授業にはない文字でのコミュニケーションを可能にする。発話は難しくとも文字であれば表現できるという学生も少なくない。

「～について全員チャットに書いてください」と指示すると、多種多様な意見が平等に並ぶ。特徴的な意見については、学生を指名して具体的に説明してもらっても良いだろう。「画面共有」は、学生に発表してもらう上で便利である。プレゼンテーションが苦手な学生も、落ち着いて話せるという。聴衆側も資料をしっかり見て聴くことができる利点がある。「チャット」と併用すれば、普段より多くのコメントを聴衆から集められるだろう。「ブレイクアウトルーム」は多くの教員が用いるようになったが、これを授業終了後に用いることも効果的だ。つまり、授業終了と同時にブレイクアウトルームを起動し、希望する学生は残ってグループで自由に話して良いとするのである。教室においてはよく見られる授業後の雑談時間を創出するのである。

第2に、コロナ禍における学習方法を指導することである。遠隔授業が多い状況下においては、とくに自主学習ができる学生とそうでない学生の間の学習量および学習成果の格差が大きくなる。出席率が高いからといって上手く学べているとは限らない。まず、遠隔授業についてこられていない学生がいないかを確認しよう。あるいは、オンラインお茶会や、就職活動相談会などを先輩学生主導で企画してもらうのも良いだろう。

コロナ禍がいつまで続くかはわからない。私たちにできることは、与えられた環境の中で、目の前の学生にとってベストな学びを実現することである。なかでもゼミは、緊密な人間関係を通じた総合的な人物育成を志向するため、学びを促す人間関係づくりにコロナ禍以前以上に心を配りたい。そしてこの経験が、新しいゼミのあり方の創造につながることを期待したい。

西野毅朗（2020）「ゼミの関係性は遠隔授業でどのように変わったのか 教員・学生対象インタビューからみえたこと」教育学術新聞、第2825号。